

西インドはプルシャプラにビリンチとして知らるる熱心なる佛法信者の女ありき。女の身なれば無力なれど男子を生みて佛道の興隆に役立てむと佛に祈りて、クシヤトリア及びブラフミーンの男によりて三人の男子を得。三人は長じて母の望みに従ひ佛道に入る。いづれも世親と呼ばれしが、後長男は大乗の道に入り、執著を離れむと欲して名を無著と改む。また世人三男を次男と區別しビリンチヴァサと呼べり。かくて世親と言はば次男のことなり。

無著は彌勒菩薩に會ひて教へを受けむとヒマラヤの山に分け入りて修行す。修行十年に及ぶも彌勒に會ふこと適はず。意氣消沈して修行を諦め山を下る。道に一人の男あり。鑿を揮ひて山の一角の岩を削る。無著問ひて曰く何すれば岩を削ると。男答へて曰く、我家この山の麓にありてその陰になりて陽當らず、依つて我この山を削り去らむと欲すと。これを聞きて無著發奮し、再び山に戻りて修行に入る。更に十年菩薩の現前すること更になし。希望を打碎かれし無著荷物を負ひて山道を下る。途中一匹の犬に遇ふ。見れば下肢の一部を失ひたるが如く血を流しつつ足を引摺るのみなり。憐みを催し無著傍らに寄り、他に術もなければ傷口を舐めてこれを癒さむとす。俄に犬の姿消えそこに彌勒菩薩立ち給ふ。無著問ひて曰く多年我菩薩を見奉らむと苦行に勵みしにかくも長くそを許し給りざりしは何故ぞと。菩薩答へてのたまふやう、我は常に汝と共にあり、汝の得見ざりしのみと。無著の喜ぶこと當に天にも無はむばかり。菩薩を肩に載せ奉りて行く。然るに道行く人、菩薩を見ること能はず。市場を過ぎ行くに老婆あり。初めて無著を見咎めて曰く、汝何すればかく汚らはしき犬を負ふぞと。

無著その後、現觀莊嚴論を著して密教修行の道を開く。密教においては文殊菩薩智慧を司り、彌勒菩薩方便を司るとせられ、彌勒の直弟子たる無著の存在の重きこと譬へやうもなし。片や弟の世親小乗の道を歩みて説一切有部に入り研鑽を積む。その師のサーンキア派との論戰に敗るるや、世親一書を著して法敵を論破し、時の王の賞を受け弘くその名を知らるるに至る。その後佛教の存在論の集大成たる阿毘沙達磨俱舍論を著し小乗佛教の頂點に立つ。俱舍論は佛教の金字塔の一にして、中國を経て遠く日本にも傳り、大乘の僧侶と言へども凡そ佛教學を志す者は學ぶべき必讀の書とせらる。

世親、アヨーディアの地に據つて説一切有部の教へを説きたるが、一日兄無著の訪問を受く。雁の便りに兄は既に亡き者と聞及びし世親、怪しみつつ兄に會ひ聽て兄弟の間に論争起ころ。主知主義の小乗の立場に立つ世親、物質・思考を超えたる次元のあることを知らず。大學者として精緻なる論理を引提げ無著に舌鋒鋭く迫るも、この世の者に非ざる兄に異次元の世界を疑ふべくもなく示さるるに及んで、之まで安住せし論理的日常次元の世界一舉に崩壊す。自らの非を悟りし世親、舌をきりて佛陀にその非を詫びむと悔ゆること甚し。兄それに及ば

ず爾後その舌を以て大乘を説くべしと慰めて靈界に去る。

大乘に轉ぜし世親の活躍著しく、唯識論を確立し、更に淨土論の基礎を築く。正信偈に「天親菩薩造論説」、「天親菩薩論注解」とある天親菩薩は他ならぬ世親なり。親鸞聖人世親より一字を受けて親鸞と號せしことによつても明らかなるが如く、わが國においては世親は龍樹菩薩と並び佛祖に次ぐ地位を得たり。されどその兄なかりせば弟の佛道を究むるは能はざりしことなり。